

# 説経節『小栗判官』成立再考

松尾 剛次

## はじめに

説経は、本来、語り物（文字の力を借りずに、口から耳に伝えられる口承文芸）の一つで、説経節、説経浄瑠璃とも表記される。説経の、もともとの意味は、経典や教義を説いて民衆を教化することだが、ここでは、民間を放浪する大道芸人が、寺社の縁起や因縁談などを語った語り物文芸を指す。それらは鉦やささらなどを伴奏にして歌われ、江戸時代には、三味線を伴奏に、操り人形によって演じられた。ここで取り上げる『小栗判官』は、『さんせう太夫』、『かるかや』、『しんとく丸』、『愛護の若』とともに五説経と呼ばれ、説経を代表する作品の一つである<sup>①</sup>。それらは、広範な人気を得、たとえば森鷗外の小説『山椒大夫』も、説経『さんせう太夫』を基にした小説である。

さて、説経『小栗判官』が、いつごろ、だれによって制作されたのかといった事は、口承文芸の常として、なぞに包まれている。また、現在の説経『小栗判官』が、長期の間に説経師たちによって種々の話が付け加えられ、物語的成長をとげたものであることは言うまでもない。ここでの私の主たる狙いは説経『小栗判官』の元話の成立状況を明らかにすることにあるが、併せて、従来、さほど注目されてこなかった絵巻である『遊行縁起』を紹介したい。

## 1 説経『小栗判官』と「鎌倉大草紙」

まず、論述の都合から、説経『小栗判官』の概要を述べておこう<sup>②</sup>。

小栗は鞍馬の毘沙門の申し子として生まれた。両親のすすめる妻をことごと

く嫌い、みぞろが池の大蛇と契って、常陸の国に流される。薬商人後藤左衛門から武蔵相模の郡代の一人娘照手姫の美しさを聞いた小栗は、横山一門の了承を得ないで婿入りをする。横山一門はこれを憎んで鬼鹿毛という人食い馬の餌食にしようとするが、小栗は見事にこれを乗りこなしたので、横山の三郎の策で、とうとう小栗と十人の臣下を毒殺する。横山は照手を相模川に沈めよと命じたが、鬼王・鬼次兄弟は、これを助け、姫を乗せた牢輿はゆきとせが浦に漂着する。村君の太夫はこれをあわれんで養うが、妻は虐待したうえで売り飛ばす。照手は各地を転々と売られたあげく、美濃国青墓の万屋の君の長に買い求められる。照手は、遊女の勤めを拒み、下水仕の労役に従事する。一方、小栗と家臣たちは冥途に赴くが、家臣たちの忠誠に感じた閻魔大王は、小栗を藤沢遊行寺の上人の弟子として現世に送りかえした。藤沢の上人は、その胸札に、「藤沢上人の弟子として熊野の湯に入れてくれれば薬を送る」という閻魔の自筆の判があるのを見て、餓鬼阿弥と名付けて土車に乗せ、この車を引く者は供養になると書き付けて引き出させる。上人と別れた後も、土車は代る代る引き続けられ、照手も小栗の変わり果てた姿とは知らず、主人に暇をもらって夫の供養にと引く。熊野の湯でもとの姿となった小栗はわが家を訪れる。父と再会し、参内して畿内五か国にそえて美濃国を賜る。美濃国に入った小栗は、土車を引いた下水仕を尋ね、照手と再会する。死後、小栗は美濃墨俣に正八幡荒人神として、照手は結ぶの神としてまつられる。

さて、説経『小栗判官』の元話の成立の謎にせまった研究は多い<sup>③</sup>が、和辻哲郎<sup>④</sup>、福田晃<sup>⑤</sup>、室木弥太郎<sup>⑥</sup>三氏の説が代表的である。まず、それら三つの説をごく簡単に紹介し、問題点を指摘しよう。

和辻説は、鎌倉公方足利氏を中心に関東地方の動静を記した歴史書で文明十一（一四七九）年以後に成立した<sup>⑦</sup>『鎌倉大草紙』<sup>⑧</sup>の次のような話が、基になって作成されたとする。

なお、鎌倉公方というのは、室町時代において、現在の関東地方と山梨・静岡県を統括した室町幕府の地域行政機関を鎌倉府というが、その長を指す。足

利尊氏の二男基氏が貞和五（一三四九）年に鎌倉へくだってきて以後、彼の子孫がその地位を継承した。その補佐役である関東管領には、貞治三（一三六四）年以來、上杉氏が世襲的に任命された<sup>⑨</sup>。

一、<sup>(1423)</sup> 応永三十年癸卯春の頃より常陸国住人小栗孫五郎平満重といふ者ありて謀反を起し、鎌倉の御下知を背ける間、持氏御退治として御動座被成、結城の城まで御出、同八月二日より小栗の城をせめらるる、小栗兼而より軍兵数多城よりそとへ出し防戦けれども、鎌倉勢は一色左近將監・木戸内匠助先手の大将として、吉見伊予守・上杉四郎荒手にかはりて両方より責入ければ、終に城を被責落、小栗も行方しらずおち行けり、（中略）今度小栗忍びて三州へ落ち行けり、其子小次郎はひそかに忍て関東にありけるが、相州権現堂という所へ行けるを其辺の強盜ども集りける処に宿をかりければ、主の申は、此牢人は常州有徳仁の福者のよし聞、定て隨身の宝あるべし、打殺して可取由談合す、乍去健なる家人どもあり、いかがせんといふ、尤と同じ宿々の遊女どもを集め、今様などうたはせをどりたはぶれかの小栗を馳走の躰にもてなし酒をすすめける、其夜酌にたちけるてる姫といふ遊女、此間小栗にあひなれ此有さまをすこししりけるにや、みづからもこの酒を不呑して有けるが、小栗をあはれみ此よしをささやきける間、小栗も呑やうにもてなし酒をさらにのまざりけり、家人共は是を知らず、何も酔伏てけり、小栗はかりそめに出るやうに林の有間へ出てみければ、林の内に鹿毛なる馬をつなぎて置けり、此馬は盜人ども海道中へ出大名往来の馬を盜来けれども、第一のあら馬にて人をも馬くひふみければ、盜ども不叶して、林の内につなぎ置くけり、小栗是を見てひそかに立帰り、財宝少々取持て彼馬に乗、鞭を進め落行ける、小栗は無双の馬乗にて片時の間藤沢の道場へ馳行上人を頼れければ、上人あはれみ時衆二人付て、三州へ被送、かの毒酒を呑みける家人并遊女少々酔伏けるを河水へながし沈め財宝を尋取、小栗をも尋けれどもなかりけり、盜人どもは其夜分散す、酌にたちける遊女は酔たる躰にもてなし、伏けれどももとより酒をのまざ

りければ水にながれ行、川下よりはひ上りたすかりけり、其後永享の比小栗三州より来て彼遊女をたずね出し、種々のたからを与へ、盗どもを尋、みな誅伐しけり、其孫は代々三州に居住すといへり

ようするに、常陸の国の住人小栗満重は応永三十年に、戦い破れて三州に落ち、その子の小次郎は関東に忍んでいたが、相州権現堂という所で強盗の集まる所に宿をかりる。強盗どもは毒酒で小栗を殺しその宝を奪おうとするが、遊女の一人照手がそのたくらみを小栗に知らせる。無双の馬乗りであった小栗は鹿毛とよばれた荒馬に乗って藤沢の道場に避難し、上人は時衆二人を付けて小栗を三州に送る。永享のころ、小栗は三州より来って照手をたずねだし、種々の宝を与え、強盗どもをすべて誅伐する。小栗の子孫は代々三州に居住する<sup>⑩</sup>といった内容であって、確かに、説経『小栗判官』の話の原型である。

他方、室木氏は、『鎌倉大草紙』が聞き書き資料であることや、藤沢山小栗堂縁起を裏書きする伝承の存在から、「説経節『小栗判官』は『鎌倉大草紙』が示す史実あるいは伝説から直接素材を仰いでできあがったのではなく、その前に、藤沢遊行寺（清浄光寺）の閻王堂後の小栗堂と縁故のある念仏勧進の比丘尼が藤沢上人や自分（照姫）を中心に『小栗判官』の物語を語った。例えば、上人が小栗を本復させた医療の妙を賛嘆するという語りもあった<sup>⑪</sup>」とする。室木説は、示唆に富んでいるが、なぜ、そうした話が作成され、語られたのかという契機が説得力あるかたちで展開されていない。

さらに、福田氏も、『鎌倉大草紙』には、小栗の蘇生譚がないことなどから、小栗伝説の原型は小栗氏の本貫の地、常陸小栗、すなわち、現在の茨城県真壁郡協和町太陽寺に拠る遊行巫女によって、小栗氏の滅亡後その靈魂を慰撫するために語り出され、それが時衆本山藤沢の遊行寺（清浄光寺）に運び込まれて、物語的に飛躍的な発展成長を遂げたもので、唱導文学の最後の管理育成者は、青墓（岐阜県青墓）の宿にたむろしていた念仏比丘尼であろうとする<sup>⑫</sup>。

以上のように、従来の説は、『鎌倉大草紙』が基となったか否かが大きな論点で、『鎌倉大草紙』は『小栗判官』の元話ではないとする立場に立った福田

説が有力である。

しかし、福田説も、資料がないこともあって推測にとどまっている。とくに、常陸小栗の話が、なぜ藤沢で物語的展開を遂げるのか、推測の域を出ていない。福田氏は、常陸小栗（小栗御厨）も藤沢（大庭御厨）もいずれも、もと御厨、すなわち伊勢神宮領という領主の共通性に求めている<sup>13</sup>が、領主のレベルと、物語の担い手のレベルとは、次元を異にし、領主が共通だから、小栗鎮魂の話が、藤沢で展開できたとは考えがたい。福田氏の論理だと、数多い伊勢神宮領で小栗の話が展開できることになるが、そうではない。ようするに、遊行寺と説経『小栗判官』との関係が有機的に説明されておらず、遊行寺は説経『小栗判官』の作成者というよりも管理者と位置付けられている。それゆえ、私は、小栗と藤沢とを結ぶ、無理のない仮説を提起したい。

## 2 藤沢遊行寺勸進と説経『小栗判官』

さて、説経が勸進と関係があることもよく知られている。勸進とは、もともと、人を勧めて仏道に入らせ、善根・功德を積ませることを意味したが、平安時代の終りごろからは、寺社の堂塔や仏像の造立・修理のために、人々に勧めて米・銭の寄付を募ることを意味するようになった<sup>14</sup>。

とすれば、説経『小栗判官』も、ある寺の再建勸進に関連して作成されたのではないかとまず考えられる。その寺とは、説経『小栗判官』の物語のなかで、重要な役割を与えられている寺と考えられるが、それこそは神奈川県藤沢市にある時宗の藤沢山清浄光寺（遊行寺）であろう<sup>15</sup>。時宗というのは、一遍を開祖とする鎌倉新仏教の一派で、踊りながら念仏を唱える踊り念仏で有名である。

説経『小栗判官』では、上野が原で生き返った小栗が、藤沢上人によって見出され、「藤沢上人の弟子として熊野の湯に入れてくれれば薬を送る<sup>16</sup>」という閻魔大王のメッセージを受けて、餓鬼阿弥として土車に乗せられ熊野に送られるように、主人公小栗のこの世での復活が開始される重要な場である。しかも、それは、「藤沢上人の弟子として」としてという条件付きなのである。そ

れゆえ、本説経と時宗の藤沢山清浄光寺との結びつきの強さは明白である。

もっとも、餓鬼状態にあった小栗が、熊野に送られ、熊野の湯に入って本の姿に再生を遂げるのであり、熊野神社も説経節『小栗判官』では重要な場である。しかし、この熊野神社も時宗と密接な関係にあったことは、これまたよく知られている。たとえば、一遍が熊野権現の神託を受けて悟りを得て以来、彼の教団へ加入するには、熊野神宣の体証者一遍を知識と仰ぎ、熊野権現を以て一遍悟りの師として、帰依することを宣誓した後に入団を許された。そして時衆は、熊野権現を祀った<sup>17)</sup>。それゆえ、本説経の作成の契機として藤沢山清浄光寺の再建勧進を想定するのはもっとも自然ということになる。

ところで、小栗判官の話の主人公小栗氏は、先述のように、常陸国真壁郡小栗邑（現、茨城県真壁郡協和町）から起こった武士である。小栗満重は応永二十二（一四一五）年、上杉禅秀に与し（上杉禅秀の乱）、鎌倉公方足利持氏と争ったが、同三十（一四二三）年、大いに敗れ、子の助重とともに三河に逃れた。助重は後に旧地に帰ったが、康正元（一四五五）年に公方足利成氏に攻められ城が落ち滅亡した。この助重が小栗判官に当たると考えられている<sup>18)</sup>。

とすれば、説経節『小栗判官』は、小栗が、いったんは復活をとげた話であるので、応永三十（一四二三）年以降、康正元（一四五五）年までの間の清浄光寺再建勧進に際して作成された可能性が高い。そこで、その時期の清浄光寺の再建活動をみてみると、『鎌倉九代後記』応永三十三（一四二六）年二月十四日条に注目すべき記事<sup>19)</sup>がある。

同（応永）卅三年二月十四日、藤沢山炎上

すなわち、応永三十三年二月十四日に、清浄光寺は炎上していたのである。次にこの応永の火事と再建活動に注目して清浄光（藤沢遊行）寺についてみよう。

ところで、この火事の時は、長老太空の努力により復興が成功した。太空は、『時宗辞典』<sup>20)</sup>によれば、次のような人物である。

太空（一三七五—一四三九）遊行十四代上人、師阿、駿河（静岡県）足

洗氏の出身、至徳二（一三八五）年遊行十一代自空の弟子となる。若くして内典外典の学を修めた。応永一九（一四一二）年三八歳七条道場にて遊行相続。応永二四（一四一七）年遊行を唯阿に譲り、藤沢山遊行寺に帰住し、独住。翌年十月六日上杉禪秀の乱の敵味方怨親平等碑を遊行寺にたてる。同三十三年遊行寺炎上。<sup>(1439)</sup>永享十一年藤沢にて入寂。

ここでは、太字の部分が注目される。すなわち、太空の時期には、清浄光寺では、公方方も管領方も、敵味方の区別なく平等に鎮魂していたことと、遊行寺の炎上である。遊行寺炎上は、ひとまずおき「敵味方怨敵平等供養碑」についてみよう。

遊行寺内には応永二十五（一四一八）年に太空が建てたという「敵味方怨敵平等供養碑」が建っている。それには次ぎのような銘文が記されている。<sup>②</sup>

南無阿弥陀仏

自応永二十三年十月六日兵乱、至同廿四年、於在々所々、敵御方為剪刀水火、落命人畜亡魂者、皆悉往生浄土故也、過此塔波之前、僧俗可有十念者也 応永廿五年十月六日

すなわち、この碑は、応永二十三（一四一六）年十月から翌年一月にかけて鎌倉を中心に起きた上杉禪秀の乱の戦争犠牲者を敵味方区別することなく供養するものであった。このことから、遊行寺は、公方の篤い信仰を受ける寺院ではある<sup>②</sup>が、小栗氏のように、足利將軍、関東管領方の武士も遊行寺は受け入れ逃がすような寺院であったことを推測させる。

つぎに、遊行寺炎上と太空についてみてみよう。すなわち、江戸後期の「遊行系図」<sup>③</sup>（江戸後期のもの）によれば、「十四代太空（藤沢八代）十一代御弟子元弥阿 百一代後小松院即位三十年応永十九（一四一二）年壬辰三月二五日於洛陽七条金光寺賦算、三十八、遊行六年、百三代後花園院即位十一年永享十一<sup>(1429)</sup>（一四三九）年己未十一月十四日於相州藤沢山清浄光寺入滅六十五、入戒十二独住二三年駿州生、当代藤沢亦回録再興一百二十坪之堂也、但一丈二尺間」とある。

この史料で、とくに注目されるのは、太字の部分である。それによれば、応永三十三（一四二六）年の大火後、太空により、百二十坪の堂が再興されたことがわかる。それゆえ、太空による再建は江戸時代においても大いに記憶されていた大事業であったことがわかる。

この太空による再興に関しては、『時宗過去帳』の尼衆の部に、「遊行一五代（尊恵）藤沢清浄光寺造営のために結縁をうけ、その代償として過去帳にのせた人数は一一三四二人におよんだ」<sup>24</sup>と記されている。『時宗過去帳』を調査すると、実際は僧衆三二六六人、尼衆二五二二人（併せて五七八八人）が記されている<sup>25</sup>が、通常、一代で三百人以下が普通である<sup>26</sup>ことを考えると、異常に多いことがわかる。この尊恵こそは、太空の弟子として、太空が中心となった勧進活動の実行責任者で、太空引退後、その勧進を引き継いだのであった。

さらに、注目されるのは、次の史料<sup>27</sup>の太空が全国遊行のさい、加賀国（石川県）で、出現した斉藤実盛の亡霊を鎮めた話である。

六十四代祖他阿上人者、(中略)加賀潮津道場にして、応永二一年三月五日より七日七夜の別時あり、中日にあたりて白髪なるもの来て算をとる、世のつねの人ともおほえぬものかなと思はれけれども、諸人群集の砌なれば、まきれて見えさりけり、翌日に篠原の地下より斉藤別当こそ遊行へ参て算を給たれと風聞せり、是則天に口なし、人を以てさへつるといふ謂歟、同十日地下より申様は、斉藤別当の為に卒塔婆をあそはして給へ、立候はんとて十四五尋はかりの木を削て進したり、さらはとてかかれぬ其文云、南無阿弥陀仏三世諸仏出世本懐為説阿弥陀仏名号云々、(中略)、又意趣書に(中略)我朝の実盛か算を給て出苦する事も、只時剋到来なりといふ事、書あらはされたり、仍往来の賓客、上下の旅人、此卒塔婆を書うつさぬ人はなかりけり、

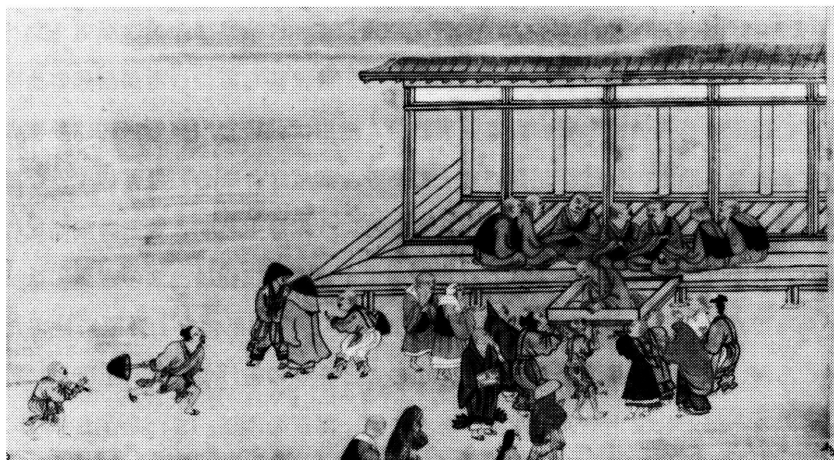
本史料は、『遊行縁起』の「太空」の部分で、太空が加賀潮津道場で斉藤実盛の霊に賦算し、亡霊を鎮めたことを伝えている。賦算というのは、「南無阿弥陀仏」を称えた人に、南無阿弥陀仏を称えれば一切衆生（六十万人）が必



ず浄土に往生する旨が刷られた札（念仏札）を配ることで、時宗の念仏を勧める独特なやり方である<sup>28</sup>。

『遊行縁起』は、遊行十三代尊明、十四代太空、十五代尊恵の絵詞伝（絵と詞で伝記を記したもの）で、応永二十四・二十五（一四一七・一八）年ころに制作されたと考えられている<sup>29</sup>。従来は、さほど注目されていないが、室町時代の時宗教団、とくに、ここで問題としている太空の活動を知るうえで重要な伝記資料、絵画資料である。

図は、太空が実盛に賦算するシーンで、太空の面前で念仏札を受け取る白髪の老人が斉藤実盛の亡霊であろう。当時の賦算活動の様子が伺える。



図（神奈川県立歴史博物館蔵）

この太空による斉藤実盛の亡霊への賦算の話は、京都まで伝わっていた。すなわち、醍醐寺三宝院門跡の満濟（一三七八—一四三五）の日記、『満濟准后日記』応永二十一（一四一四）年五月十一日条<sup>30</sup>によれば、「齊藤別当眞盛<sup>サネ</sup>霊、於加州篠原出現、逢遊行上人、受十念云々、去三月十一日事歟」とあって、二か月後には京都の満濟の耳にも入っていた。さらに、謡曲『実盛』は、世阿弥が太空の話しをもとに制作したのである<sup>31</sup>。ようするに、太空とその弟子たちは、

そうした話を創作（おそらく太空を発信源とする）し伝えるネットワークをもっていたのである。

とすれば、この太空による再興勸進にさいして、説経『小栗判官』物語の元話（原型）は作成されたと考えられる。ようするに、小栗氏が遊行寺に逃げ込み、太空が助けたという話が、遊行寺再興勸進にさいして喧伝され、それが物語的成長を遂げたと考えられる。

ところで、この説経『小栗判官』の元話に関しては、清浄光寺の長生院に伝わる『小栗略縁起』が注目される。長生院は、永享元（一四二九）年に照姫の建立と伝える。照姫は、出家して長生比丘と号し、永享一二（一四四〇）年十月十四日に没したと<sup>32</sup>いう。

『小栗略縁起』の概要は資料のようなものである。<sup>33</sup>

小栗満重は、落城後、主従十一騎となって三河に落ちて行ったが、その途中で、相模国の郷土横山大膳の家に仮寓した。横山は強盗で、彼の家には多くの遊女がいた。照姫の父は、北面の武士であり、満重は、この照姫と仲よくなった。横山は、満重を憎んで、必ず人を食うという鬼鹿毛という馬を満重にしむけた。しかし、それが失敗すると、毒酒をすすめた。主従は、この密謀にひっかかって落命した。横山は、満重の財宝を奪い、その死体を上野原に捨てた。ところが、そのころ藤沢上人太空は、このことを夢の告げでしり、上野原に行ってみるとはたして十一人の死体があったが、満重のみは、まだ息があったので、満重を連れ返って、熊野本宮の温泉で湯あみさせた。そうすると、満重は元気になった。一方、照姫は、満重主従が殺されたので、世をはかなみ、横山の屋敷から逃げ出したが、見つかって河に投げ込まれた。しかし、観音様の御利益で溺死を逃れ、しばらく野島が崎の漁父に養われていた。ところが、この漁父の妻が、照姫の美貌を嫉妬して、照姫を人買商人に売ったので、これより照姫は、美濃青墓の宿で遊女となっていた。元気になった満重は、やがて三河に帰り、横山の罪状を幕府に訴えたところ、「希有の仏徳なり」と賞せられて、判官に補せられ本領を拝領した。そこで本国の常陸に帰る途中、横山をとらえ

て処刑し、遊行寺に立ち寄って先恩を謝し、青墓宿より照姫を招いて品物を与えて感謝した。応永三十三（一四二六）年三月、満重は死去した。弟の助重は、満重の養子となり、遺領を継ぎ、鎌倉に来たとき、遊行寺に立ち寄り、満重と郎等らの墓碑を建てて供養した。

ようするに、『小栗略縁起』は、小栗を太空が助けるはなしであるが、この『小栗略縁起』は、遊行寺再興勸進にさいして喧伝され話が、藤沢を中心にして物語の成長を遂げたものであろう。

### おわりに

最後にまとめとして、従来、説経は口承文芸、語り物文芸といわれ、ともすれば、民間の無名の遍歴の吟遊詩人が制作したと考えられてきた。しかし、説経と寺社勸進との関係を考えれば、その元話に関していえば、ある特定の寺社の再興などの勸進にさいして制作されたのが多いのではなかろうか。実際、本稿で扱った説経『小栗判官』のみならず、『さんせう太夫』も、丹後国分寺の再興勸進に関連して作成されたものであった<sup>③</sup>し、そのほかの説経もこうした視点で見直せば、作成の謎も解けるのではなかろうか。

#### 【注】

- ①説経一般については、岩崎武夫著『さんせう太夫考 中世の説経語り』（平凡社、一九七三）、室木弥太郎校注『説経集』（新潮社、一九七七）、荒木繁・山本吉左右校注『説経節』（平凡社、一九七三）の解説などを参照。
- ②『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八六）による。
- ③説経『小栗判官』に関する論著のみを挙げる。西角井正慶「蘇生譚愚註」（『國學院雑誌』五五一一、一九五四）、折口信夫「小栗外傳（餓鬼阿彌蘇生譚）」『折口信夫全集 第二卷』（中央公論社 一九五五初版、一九七二新訂再版）、和辻哲郎『日本芸能史研究（歌舞伎と操り浄瑠璃）』（岩波書店、一九五五。一九七一年に改訂版がでた）、福田晃「小栗照手譚の生成」（『國學院雑誌』六六一一、一九六五。以後、福田 a 論文と略す）、『小栗』語りの発生（福田著『中世語り物文芸』三弥井書店、一九八一、所収）、室木弥太郎著『語り物の研究』（風間書房、一九七〇）、高田衛「鬼鹿毛とその騎士」（『日本文学』二一一三、五、九、一九七二）、「巫女論—照手姫について—」（『日本文学』二二一六、一九七三）、岩崎武夫『さんせう太夫考 中世の説経語り』（平凡社、一九七三）、棚木恵子「説経『小栗判官』の構想」（『古代研究』12、一九八〇）、高遠奈緒美「照手姫の事跡」（『東洋大学大学院紀要』二〇、一九八三）、橋本堯「『小栗判官』と孫悟空」（『和光大学人文学部紀要』

- 17、一九八三)、渡辺衆介「小栗判官の形成」(『国語と国文学』七五八、一九八七)、藤掛和美「説経『をぐり』と墨俣正八幡」(『芸文東海』四、一九八四)、「説経『をぐり』と青墓」(『芸文東海』五、一九八五)、「絵巻『をぐり』の成立をめぐって(一) — (八)」(『芸文東海』十一—十八、一九八八—一九九一)、廣末保「漂泊の物語 説経「小栗判官」異郷からの訪れ」(平凡社、一九八八)、丸山静著『熊野考』(せりか書房、一九八九)、ふるさと紹介史料製作委員会編『小栗氏と小栗伝説—小栗判官と照手姫の世界—』(協和町教育委員会、一九九〇)、上原輝男「青墓・墨俣の原風景とトランスホームーション」(『國學院雑誌』九二—一、一九九一)、西田耕三著『生涯という物語世界』(世界思想社、一九九三)、安田夕希子「小栗判官伝説の精神史」(『日本思想史』五二、一九九八)ほか。
- ④前掲和辻著〈前注③〉。
- ⑤前掲福田 a 論文〈前注③〉。
- ⑥前掲室木著〈前注③〉。
- ⑦『群書解題 第四』(続群書類従完成会、一九六〇)二六頁。
- ⑧『改訂史籍集覧 第五』(臨川書店、一九八三)一九—二一頁による。
- ⑨拙著『中世都市鎌倉を歩く』(中公新書、一九九七)
- ⑩この要約は、前掲廣末氏著四七・四八頁を参照した。
- ⑪前掲室木著〈前注③〉三六七頁。
- ⑫前掲福田 a 論文〈前注③〉。
- ⑬前掲福田論文〈前注③〉。
- ⑭中村元著『仏教語大辞典』(東京書籍、一九七五)の「勸進」の項を参照。勸進については、拙著『勸進と破戒の中世史』(吉川弘文館、一九九五)を参照。
- ⑮遊行寺については、橘俊道著『遊行寺 中世の時宗総本山』(名著出版、一九七八)や『藤沢市史 通史編四』(藤沢市役所、一九七二)『藤沢市史 通史編五』(藤沢市役所、一九七四)が参考になる。
- ⑯『古浄瑠璃 説教集』(岩波書店、一九九九)所収の絵巻『をぐり』では、「この者を藤沢のお上人のめいたう聖の一の御弟子に渡し申」とある。それを、『古浄瑠璃 説教集』の解説では、藤沢上人イコール「当麻道場の明堂上人の一の弟子である上人」と理解し、餓鬼阿弥をその上人に渡すと解釈している。私は、当時の藤沢上人は太空であり、また明堂上人(一五四九年入滅)は時期的にあわないことなどから、「めいたう聖」は「明道の聖」の意味に解釈する。すなわち、「藤沢上人で、仏道に明るい聖(太空)の一の弟子として」と解釈する。
- ⑰吉川清著『時宗阿弥教団の研究』(藝林社、一九五六。一九七三に再版がでた)一六七頁。
- ⑱小栗氏については、前掲『小栗氏と小栗伝説』〈前注③〉が詳しい。
- ⑲『鎌倉九代後記』『改訂史籍集覧 第五』(臨川書店、一九八三)一五頁。
- ⑳『時宗辞典』(時宗教学研究所編、一九八九)の「太空」の項より抄出。表現も少し変えている。
- ㉑前掲『遊行寺』〈前注⑮〉九八頁。
- ㉒前掲『遊行寺』〈前注⑮〉一〇三—一〇六頁。
- ㉓東大史料写真帳「彰考館所蔵典籍(未)」四六、架蔵番号6170/2/46。年号に西暦を付けた。
- ㉔前掲『藤沢市史 通史編五』〈前注⑮〉八七頁。
- ㉕時宗教学部編『重要文化財 時宗過去帳』(時宗教学部、一九六九)一六一—一八頁。
- ㉖同前。
- ㉗『遊行縁起』(『時宗宗典上下』時宗宗務所、一九七四)四六七・四六八頁。『遊行縁起』の原史料

自体は神奈川県立歴史博物館に所蔵されており、引用にさいしては、原史料との対校を行った。それに際して、神奈川県立歴史博物館の相沢正彦さんにお世話になった。

⑳前掲『時宗辞典』〈前注⑳〉の「賦算」の項。

㉑前掲『遊行縁起』〈前注㉑〉の解説。

㉒『満濟准后日記 上』（続群書類従完成会、一九七五）四六頁。

㉓前掲『時宗辞典』〈前注⑳〉の「実盛」の項。

㉔前掲『藤沢市史 通史編四』〈前注⑮〉八四六頁。

㉕前掲『藤沢市史 通史編四』〈前注⑮〉八四七・八四八頁。

㉖拙稿「説経節『さんせう太夫』と勸進興行」（前掲拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注⑭〉所収）参照。

#### \* 討議要旨

相田満氏は、『鎌倉大草紙』の話は突出して説話的であるという印象がある、従来の説と今回の発表との接合点を知りたい、と尋ね、発表者は、従来考えられてこなかった、元話成立の契機を考えようというのが発表の意図である、従来の説では室木説に近い、と答え、さらに相田氏は、当時の関東の複雑な政治状況との関わりはどうか、と尋ね、遊行寺のアジール性を示すこのような出来事が実際にあり、それが勸進に利用されていったのだろう、と答えた。

中野猛氏は、なぜ真壁での話を取り込まれたのか、助重は最後立ち寄ったというより逃げ込んだのではないかと、そういったことを考えると、小栗一族も形成に関わっているのではないかと指摘した。